

今日の説教のポイント <使徒言行録9章19節b~31節>

180度転換したパウロ。そこに見ることができる信仰の魅力。

- ①「サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐあちこちの会堂で、『この人こそ神の子である』と、イエスのことを宣べ伝えた。」(19-20)

キリスト者を血眼になって捕えようとし、ステファノの殺害に賛成した(8:1)パウロが、「この人こそ神の子である」と語る者となったのです。180度の転換です。パウロがまさにステファノの後を継ぐ者となったのです。キリスト教がなぜ信じるに足るものなのか、その証拠を示すことはできません。ただこのパウロの転換や、イエス様の死後の弟子たちの様変わり背後に、それらを起こさせた何かがあるはずだと言えるだけです。今日の箇所の中だけでも、2度、パウロに命の危険が及び、逃げ出さなくてはならなかったのです。この後もそれは続きます。しかし、パウロは最後まで、「この人こそ神の子である」と伝え続けたのです。「ここにあなたは何を聞くのか」、神様は私たちにそう語りかけておられるのではないのでしょうか。

- ②「皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちの所へ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。」(26:27)

キリスト者たちから恐れられていたパウロですが、アナニアに続き(9:10以下)、今度はバルナバが彼のことを受け入れます。彼らのこの受け入れがあったから、この後のパウロの働きが可能となったのです。私たちはパウロの素晴らしさに目を奪われがちですが、彼らのこの姿にも目を向けたいと思います。なにせ、少し前までパウロは、「自分の神理解は正しい。誤ったことを教えている彼らを黙らせねば」と、自分のしていることに確信を持って彼らを追い回していたのですから。人は皆、変わり得る存在なのです。特に信仰者は、信仰を持った人には聖霊が注がれ、聖霊なる神さまが働かれるのだから、その人は変わり得る、と信じている者たちです。アナニアは神様にパウロについてそれを認めるように求められ、受け入れ、パウロのために働き、パウロの受洗に立ち会いました。彼は、パウロのような人でも神様によって変わる、ということをも身をもって学んだのです。使徒たちから「慰めの子」と呼ばれていたバルナバ(4:36)も、同じような目で他者のことを見ることができる人だったのではないのでしょうか。教会は、信仰を与えられてそのような目で兄弟姉妹のことを見ることができるようになった者たちが集う場です。ここに、今の時代にも教会が必要とされる理由の一つがあると思います。